

## 特集 戦後教育学の批判的継承の行方

本特集は、2021年に刊行された神代健彦編『民主主義の育てかた——現代の理論としての戦後教育学』（かもがわ出版）に端を発する。本書は平和・人権・民主主義という3つの戦後の理念にかなう人間形成と、民主主義的な社会を育てることを目指した「戦後教育学」の現代における可能性を論じている。今日、グローバル化する社会に適応するための教育改革、具体的な教育実践が性急に求められている。本書はそうした状況に対して、教育をめぐる現実を批判的に理解し、現状とは異なる未来の教育の展望を示す上で、戦後教育学の批判的継承と復権の方途を提示する。

戦後、宗像誠也、宮原誠一、勝田守一、堀尾輝久などを中心に戦後教育学は保守勢力に対する革新派教育研究運動として展開されてきた。しかし、冷戦構造の崩壊、日本政治における革新勢力の衰退、新自由主義の台頭といった社会変化の中で、いまや戦後教育学は過去のものであり、払拭すべきとする議論が教育学研究の内部では少なくない。それに対して、本書はむしろ戦後教育学に向き合い、戦後教育学の可能性と限界を丁寧に把握することの必要性を指摘している。著者の言葉を借りれば、戦後教育学は「現在を生きるわたしたちが参照可能な未整理の教育学「遺産」」（前掲 p.6）であり、急変動する社会に対応する迅速な教育改革が求められる今こそ、戦後教育学を足がかりとした教育の理論的基盤の整備が求められる。

本特集では本書執筆者と若手研究者・院生による座談会、本書と問題意識を共有する寄稿論文の掲載を通して、世代や研究領域を超えて戦後教育学の批判的継承と復権の可能性を検討しようとするものである。

特に座談会では、若手研究者・院生をコメンテーターとし、本書全9章のなかからコメンテーターの関心にそって第3章「地域と教育」論、第5章「青年期教育論」、第9章「障害児教育論」の3つの章を選び出し、各章執筆者と議論を行った。この3つの議論は、戦後教育学研究として今後もより深めていく必要がある領域である。

寄稿論文では『民主主義の育てかた』で戦後教育学批判に対する応答として示された「理論と現実（実践）との対話」を引き受けつつ、今後の戦後教育学研究の課題を提示している。

世代を超え、かつ対象・領域を超えて戦後教育学をどう批判的に継承できるか。座談会での議論、寄稿論文を通じて、戦後教育学の今後の展開可能性を吟味する一つの試みとなれば幸いである。

（『〈教育と社会〉研究』第32号編集委員会）